

注目のキーワード「キャッシュレス」

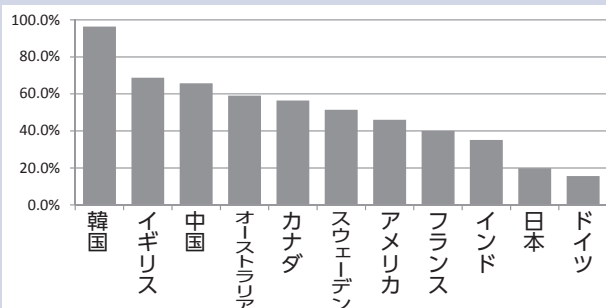
買い物の際にレジを見ると、多くのキャッシュレス決済サービスのロゴが目に入り、キャッシュレスが以前よりも身近な存在となっていることに気づきます。経済産業省が取りまとめた「キャッシュレス・ビジョン」では、2016年時点で約20%のキャッシュレス決済比率を、2025年までに40%とする目標を設定した上で、将来的には世界最高水準の80%を目指すとした「支払い方改革宣言」が提示されました。

キャッシュレスには規格の統一やセキュリティ強化など、いくつかの課題が残るものの、導入によるメリットは大きいと考えられています。多額の現金を持ち歩くことなく、スムーズに買い物ができ、自分の購買データを後から確認できることは、消費者のメリットとなります。事業者もキャッシュレス決済の導入によって、現金取り扱い事務や盗難リスクの軽減、購買データの蓄積による効率的なマーケティングの実施といったメリットを享受できます。更に、キャッシュレス決済では現金決済と異なり、購買行動に伴って取引履歴が残るため、資金移動の透明性が高まり、脱税やマネーロンダリングなどを防止する効果もあります。

日本のキャッシュレス決済比率は、諸外国と比較して低い水準にあります(※)。韓国やイギリス、中国など、キャッシュレス決済比率が高い国では、政府が政策的に主導することでキャッシュレス決済が浸透していきました。日本で今回実施されるキャッシュレス・消費者還元事業では、中小・小規模事業者によるポイント還元を支援することで、事業者・消費者双方におけるキャッシュレス化の推進を目指しています。これまでは民間事業者が積極的にプロモーションを行うことで、キャッシュレス決済が浸透してきましたが、10月からは政府が旗振り役となることで、比較的キャッシュレス化の進展が遅れている中小・小規模事業者までキャッシュレス決済が広く普及していくことが期待されています。

※金融庁による銀行口座振替・振込を考慮した試算では、キャッシュレス比率は54%(3大メガバンクのデータによる参考資料)とされている

資料 各国のキャッシュレス決済比率の状況(2016年)



(出所)一般社団法人キャッシュレス推進協議会「キャッシュレス・ロードマップ2019」

編集後記

常識、当たり前、主流派、王道、正道……って何だろう。今の時代を表すキーワードとして「VUCA」(ブーカと読む)という言葉がある。Volatility(変動)、Uncertainty(不確実)、Complexity(複雑)、Ambiguity(曖昧)の頭文字をつなぎ合わせた造語で、1990年代、冷戦終了後の複雑な世界を表す軍事用語としてアメリカで使われ始めたらしいが、最近はデジタル革命が猛スピードで進むビジネスの世界で使われる機会が増えている。

「VUCA」の時代では過去の常識は通用しない。昨日の常識は明日の非常識かもしれない。金融政策で言えば、ゼロ(マイナス)金利、量的金融緩和は非伝統的金融政策と言われ、非常識、非主流、邪道だとされながらもリーマンショック以降主要中銀のあたりの政策になり、今や次の危機時の通常の実選肢として検討されている。財政政策についてはどうだろう。とにかく財政支出の拡大が必要だとする意見は根強くあるし、シムズ理論だMMTだと財政赤字拡大を理論的に支える議論も盛んだ。しかし、今のところそうした財政赤字拡大は問題ない、どんどん進めるべきという考え方は幸か不幸かまだ当たり前、主流の考え方にはなっていない。

「VUCA」の時代に確実なものはないのかもしれない。また変化は不連続に突然起きるのがあたりの時代だ。だからこそ本当に必要なことはやるべきだ、常識に囚われるな。まさにその通りだ。ただこれまでの動きをみていると非伝統的手段は思いきって採用するだけに一度始めたらなかなか止められないもの。そこの仕組みもしっかり考え組み込んだ上で新しい手段に挑戦していくことが必要なんだろう。この考え方自体過去に囚われすぎ? (H.S)